

212
特 252
590

土曜會パンフレット 第四

トルストイ
と
ディツゲン

ニコライ・レーニン
浅生 操 譯

15冊



始



212
特 252

土曜會パンフレット 第四

590

トルストイ
と
ドイツゲン

ニコライ・レーニン
浅生 燦 譯

15 sen

特252
590

土曜會パンフレット刊行書

- 第一冊 労働者諸君に (マルクス) 一月既刊
- 第二冊 同盟に對する演説 (マルクス)
- 第三冊 マルクス主義と家族 (コロンタイ) 二月刊行
- 第四冊 トルストイ論その他 (レーニン) 二月既刊
- 第五冊 科學的社會主義と無政府主義 (ブハリン) 三月刊行
- 第六冊 赤軍の建設 (トロツキイ) 三月刊行
- 第七冊 トロツキイズムへの駁論 (スターリン)
- 第八冊 ハインドマンのマルクス (レーニン) 三月刊行
- 第九冊 レーニン主義と労働組合 (ロゾフスキイ)
- 第十冊 ラデツクミゴルキイの論争

ニコライ・レーニン 著

(一) 露西亞革命の鏡としての

レフ・トルストイ……………(アロレタリア二十五號より)

(二) エル・エヌ・トルストイ……………(社會民主十八號より)

時252
590

土曜會パンフレット刊行書

- 第一冊 労働者諸君に (マルクス) 一月既刊
- 第二冊 同盟に對する演説 (マルクス)
- 第三冊 マルクス主義と家族 (ゴロンタイ) 二月刊行
- 第四冊 トルストイ論その他 (レーニン) 二月既刊
- 第五冊 科學的社會主義と無政府主義 (アハリン) 三月刊行
- 第六冊 赤軍の建設 (トロンキイ) 三月刊行
- 第七冊 トロツキイズムへの政論 (メターリン)
- 第八冊 ハインドマンのマルクス (レーニン) 三月刊行
- 第九冊 レーニン主義と労働組合 (ロソフスキイ)
- 第十冊 ラデツクミゴルキイの論争



露西亞革命の鏡としての

レフ・トルストイ……………(プロレタリア三十五號より)

エル・ヌ・トルストイ……………(社會民主十八號より)



露西亞革命の鏡としての レフ・トルストイ

大藝術家の名前と、彼が明確に理解してゐなかつたし、また明に避けてゐた革命とを比較する事は、最初から奇妙でどこちなく思はれる。明に現象を反映しないものは、鏡と呼ばない方が正しくはないか。併しながら、我々の革命は非常に入り組んだ現象である。澤山の革命の直接的完成者、及びその關與者中には、發生中の大問題を明に理解してゐなかつた。同様に、吾々の前に事件の列をなして置かれた、現在の歴史的問題を避けてゐた多くの社會的要素がある。而して若し、吾々の前に實際に大藝術家があるのだとすれば、彼は革命の本質的な側からでも、いくらかのものを自分の創作中に反映させざるを得なかつたのである。

トルストイの八十歳祝賀に際して、論説、書簡、記録で滿された合法的な露西亞の新聞は、皆、露西亞の革命の性質と、革命の原動力と云ふ見地からする彼の創作の分解には殆ど興味を持つてゐない。此等の新聞は全部吐氣の出る程粉飾で滿ちてゐる。政府的の粉飾と、自由主義の粉飾と云ふ二つで。始の方の粉飾は朝には、エル・トルストイ追放の命を呼んでそれを果し、夕べには、彼のうちに愛國心をさがしもとめてヨオロツバの前で溫和化に努める賣文三文文士の粗雑な粉飾である。彼等の原稿に對して此種の三文文士が何をもちかうかは明なことで、それは誰をだまさうとも思はれない。が、自由主義の粉飾の方はづつと、潔白なものだけに害があつて危険である。「レチ」紙上のガデットの三味線さわぎを聞いてごらんさい。彼等のトルストイへの、最も完全なる最も熱心なる共鳴者となるから。だが實際に於ては「偉大なる求神者」につひての計畫された飾言と、大風な言辭は一個の欺瞞の連續である。何故なら露西亞の自由主義者はトルストイの神を信じもしなければ、トルストイの現存の規律

の批評にも共鳴してゐないからだ。彼等は自分の政治的資力を増す爲と、全國民的反抗の首領たる役割を真似たいために、人氣のある名前を自分に塗りつけたのだ。彼等は語句の雷鳴と爆音で、「トルストイ主義」の叫ばれるべき矛盾とは、何によりて招來されたものであるか、我が革命の如何なる弱點と缺點とを、其等があらはしてゐるか、云ふ問題への直接的な、そして明確なる答辯の必要を没し去らうと努めてゐる。

トルストイ派の創作、見解、教義に於ける矛盾は實際叫ばれるべきである。一方に於ては、露西亞生活の比類なき寫實畫であるのみならず、世界文學の第一級の創作をあつたえた天才藝術家である——が他方に於ては、キリストの愚鈍を真似んとする地主である——一方に於ては、社會的な虚偽と、欺瞞に對する驚くべき、力強い、直接な且眞實な抗議であり、——他方に於ては、——トルストイ主義者、即、露西亞の知識階級の所謂おんぼろのヒステリーのクリュビツクである。此の知識階級は自分の胸をたたきながら公然と斯う云ふ、「私は不潔な者だ。私はヘドの出る様な人間だ。だが精

神的自己革命に従事してゐるぞ、私は肉は少ししか食はないし、今は米ばかりのカツレツで生活してゐる。」と。一方に於ては資本主義的搾取の容赦なき批判であり、政府の權力、裁判と國家行政の喜劇の暴露であり、富の成長と文明の勝利に對する労働大衆の赤貧、野蠻、苦痛の成長との間の矛盾の、無限の深さの解剖であり、他方に於ては力による「惡への抵抗の否定」の馬鹿げた説法である。一方に於ては最も正氣の現實主義、あらゆる、各種の假面の剝奪であり、他方に於ては地上にのみ存在する最もみにくき者の一つにつひての説法、即、宗教であり、政府の義務を奉ずる坊主のかはりに、精神的確信を持つた坊主を置く希望、即、最も潔白な、だから特に呪ふべきギリシヤ教會派の養成である。

汝貧しくもあり、

汝富みてもある

汝力あり、

汝無力なる

——母なる露西亞よ！

斯かる矛盾に際してトルストイが、労働運動も、社会主義の爲の戦に於けるその役割も、露西亞革命をも理解しなかつたと云ふことは自ら明らかとなる。だが、トルストイの見解、教義の中の矛盾は偶然的なものではなくて、十九世紀の最後の三分の一に於て、露西亞の、生活が置かれたる、斯の矛盾的條件の表現である。農奴的法制から昨夜解放されたばかりの家長的農村が、資本と國庫に對して、直接に、奔流と掠奪するままにあたへられたのである。農村の經濟と農村の生活の古き基礎は、何世紀もの間、實際保持され來つた基礎は、異常な速力で破壊に向つて行く。而して、トルストイの見解中の矛盾は、現代の労働運動、現代の社会主義の見方からではなく（かかる評價は無論必要ではあるが、それは不充分である）家長的露西亞の田園に生じなければならなかつた、資本主義との衝突、瓦解、大衆の土地收奪に對する抗争といふ、その見地から評價さるべきである。トルストイは人類救済の新しい處方箋を發表した豫言者の様に混亂してゐる。——して、それ故に、正に、彼の教義の最も弱點である

例を宗旨に換えやうと希んでゐる外國及び露西亞の「トルストイ黨」は全くあはれである。トルストイは露西亞に於けるブルジョア革命の進撃時代に面して、露西亞農民の何百萬の間に積みかさねられた觀念と心理の表現者として偉大である。トルストイは妙である。何んとなれば、全體として害のある彼の見方の結合が、正に農民ブルジョアの革命としての我が革命の特徴を表してゐるから。トルストイの見解に於ける矛盾は、此の見方からして始めて、——我が革命に於て農民の歴史的活動が置かれたその矛盾的條件の實際の鏡となる。一方に於ては、何世紀もの農奴的歴史と、強ひられた轉形的瓦解の何十年間は、憎惡、怨恨、絶望的決意を山の様に積んだ。政府的教會、地主、地主的政府の根本的消滅の熱望、土地占有のあらゆる舊い形式と秩序の壊滅、土地の淨化、巡查階級的政府に代ふるに、自由等權の小百姓の共同生活の轉置、——此の熱望は我が革命に於て農民の凡ての歴史的歩みを越えて赤線を引いてゐる。而して、人が折々彼の見解の「方式」をそう評價する如き哀象的な「クリスト教的無政府

主義へ」よりも、この農民の傾向により、さらにトルストイの著作の觀念的内容が適合してゐると云ふ事は疑ひない。

他方に於ては、農民は共同社會の新形態に突進しつつ、此の共同社會が如何なるものでなければならぬか、自己の自由を如何なる戦ひを以てかち得なければならぬが、此の戦ひに於て如何なる指導者を彼等は持つてゐるのか、ブルジョアとブルジョア智識階級は農民の革命の利害と如何なる關係にあるのか、地主的土地占有の壊滅の爲には何故ツアルの權力の強制的排棄が必要であるのか、と云ふ事に關しては、愚鈍に依つて、非常に無關心に、大家長の様に關與してゐるのである。農民のあらゆる過去の生活は地主と官吏とを憎む事を教えたが、何處に凡て此等の問題の答辯を見出すべきかと云ふ事は教えもしなかつたし、亦教える事も出来なかつた。たゞえ、いくらかの者がこの目的のために組織せられ、ほんの少數が武器を手にして自己の敵の絶滅、ツアルの下僕と地主の擁護者の壊滅のために烽起したとは云へ、實際に於て争つたもの

は、我が革命に於て、ほんの少數にしか過ぎなかつたのである。農民の大部分は或は號泣し、或はいのり、思ひまごい、幻想し、願書を書いて、「代請人」を送つたりした、——全く、レフニコラエビツチ、トルストイの精神を體して！。こんな場合にいつでもさうである様に、政治からのトルストイの禁械、政治に對するトルストイ的否認、政治への興味の缺除、不了解は、少數者が自覺せる革命的プロレタリアトにひて進み、大数のものは、カデットの名義のものに勤勞者の集會からストルイビンの玄關へとかけ込んで、——兵士の靴が彼等をけとばし出さない限り、しつこくねだつて見たり、和解してみたり、和解を約束したりする斯の無定見な、下僕的な、ブルジョア智識階級の食物であつた。トルストイの觀念は、我が農民反抗の弱點、缺點の鏡であり、家長的農村の弱點と、「家族經濟的百姓」の怯懦の反映である。

一九〇五年——一九〇六年の軍隊叛亂をとつて見るに、我が革命のこの戰士の社會的成員は農民とプロレタリアの中間物であつた。後者は少數であつた、それ故に軍隊

内の運動は、一擧手の合圖で社會民主的になつた。プロレタリアに依り示された如き全露的結合、黨的自覺への近似さへも示してゐない。他方に於て、將校出の指導者の缺乏が軍隊叛亂の失敗原因なりとなす位間違つた考へはない。反對に、ナロードナヤ・ウオリヤ時代からの革命の巨人的な進歩は、即ち、「灰色の家畜」が武器を手にして、支配者に向ひ出したと云ふ事に依つて示される。その灰色の家畜の獨立は、非常に自由主義的地主と、自由主義的將校をどろかしたものである。兵士は農民問題の非常な共鳴者であつた。彼の眼は土地につひて言つた一言で燃え出した。一度ならず權力は軍隊に、兵士の大衆の手にうつつた、——併し此の權力の決定的な利用は殆どなかつた。兵士は思ひまどう。數時間の後に、誰かが憎い指揮者を殺して、彼等は残りの者を捕縛から自由にする。當局者と談判を開始する。而して其の後は射撃の下にたつたり、杖の下に横つたり、あらためてくびきにつながれたりする。——凡て、レフ・ニコラエビツチ・トルストイの精神を體して！

トルストイは強い憎惡、改善に對する熱し切つた熱望、過去よりの救助の希望を反映してゐる、——そして亦、未熟な幻想、未熟な政治的無教育、革命的薄弱を反映してゐる。歴史——經濟的條件は、大衆の革命的闘争の發生の必然をも、闘争への彼等の不準備をも、第一革命戰役の敗北の最も眞面目に考ふべき原因たる、惡へのトルストイ的無抵抗をも説明する。

うちくだかれた軍隊はよく學ぶと云ふ。勿論、革命的階級を軍隊と比較する事は、非常に限られた意味に於てのみ正しいのである。資本主義の進歩は刻々と、農奴的地主と彼等の政府に對する、憎惡に依り結合されたる農民の何百萬人を、革命——民主的戦闘へ推しやる條件を變化させ、鋭くしてゐる。農民自身の間にて、交換、市場支配、貨幣權力の成長は、よりさらに、家長的な古風さと、家長的哲人の觀念を追ひ出すであらう。だが大衆の革命戦闘に於て、革命の第一年と、第一回の敗北とを一つ見出せると云ふ事は疑ひない。此れは大衆の脆弱と萎縮の過去に依りて、もたらされた致

命的打撃である。限界の線はより鋭くなつた。階級黨は境を確定した。ストルイビン教授の鐵鎚の下に於て、革命的社會民主黨の確實な、そして忍耐的な書策に依りて、社會主義的プロレタリアのみならず、農民の民主主義的大衆もまた、必ず、より多数のきたえられた戦士を出动させて、トルストイ黨の我が歴史的過誤におちいり得るものを少くするであらう！

一九〇八年九月二十四日（露歴十一月）「プロレタリア」三十五號より

エル・エヌ・トルストイ

レフ・トルストイが死んだ。藝術家としての彼の世界的重要さ、思索家として説教師としての世界的な有名さ等々は、私の考へによると、露西亞革命の世界的重要さを反映してゐる。

エル・エヌ・トルストイは、偉大なる藝術家として、早くも農奴制時代に出現した。半世紀以上の彼の文學的活動中に、彼は巧みに、一八六一年以後に尙半農奴制のもとにあつた革命前期の露西亞を、また農村的露西亞を、地主と農民の露西亞を畫いた。露西亞の歴史的な生活に於ける此等の部分を書きつつ、トルストイは、彼の創作が世界の藝術的文學に於て、第一級の位置の一つを占めた程の大問題を、これ等の勞作中に置く事を得、藝術的な力に高潮させる事を得た。農奴所有者に壓迫された諸國中の一つ

に於ける革命準備代は、トルストイの天才的な啓蒙に依つて、凡ゆる人間の藝術的啓發に於ける大前進として現はれた。

藝術家トルストイは、露西亞に於てさえ、滅び行く少數者に知られて居るに過ぎない。彼の偉大なる創作を實際に凡てのものの財産たらしむるには、何十萬、何百萬の人間を暗闇と、打擲と、苦役と、赤貧のうちに閉ぢ込めておく所の、社會組織に對する戦に次ぐ戦が必要である。社會主義的變革が必要である。

トルストイは大衆が彼等の地主と資本家のくびきを顛覆して、生活の人間の條件を造つた時に、彼等に依つて常に評價され、讀まれるであらうところの藝術的創作を書いたのみならず、——現代の秩序によつて壓迫された、廣汎な大衆の氣分を恐るべき力を以て表現し、彼等の状態を表示し、反抗と憤りの本源的な感情を表現する事を得た。大體に於て一一六一年——一九〇四年の時代に屬したトルストイは、彼の創作中に恐るべき程にまたあざやかに——藝術家としても思索家としても、説教師としても

——第一回の露西亞革命のあらゆる歴史的特種の姿に肉付をした。その力とそれの弱點に肉付をした。

我が革命の最も獨特な姿の一つは、それが全世界に於て資本主義が非常に高度に發達し、露西亞に於ても可成に資本主義の發達した時代に於ける農民ブルジョア革命であつたと云ふ事であつた。此れはブルジョア革命であつた。何んとなれば、ブルジョアの支配の顛覆でなくて、ツアルの獨裁、ツアルの專制の顛覆、地主的土地所有の絶滅がその直接的な目的であつたからである。

特に農民は前者の目的を自覺せず、より卑近な、直接の目的からそれを區別し出す事を自覺しなかつた、而も、これは農民ブルジョア革命であつた。何んとなれば、客觀的條件は最初に農民生活の根本條件の變史、古き中世紀的土地所有の破棄、資本主義のための「土地の淨化」の問題を引つぱりだしたからである。客觀的條件が多かれ少かれ、獨立せる歴史的活動の舞臺へ農民大衆を引つぱり出したからである。

トルストイの創作中には農民大衆運動そのものの力も、弱さも、能力も、限界性も表はされてゐる。彼の國家に對する、巡查政府的寺院に對する、熱心な、熱烈な、しばしば容緒するところなき、辛辣な反抗は、何世紀もの奴隸制、官吏の氣儘と強奪、寺院の狡猾と詐欺瞞着に依つて怨恨憎惡が山の様につまれてゐるところの、原始的な農民民主主義の氣分をあらはしてゐる。彼の私人的土地財産に對する撓ゆまざる否定は、舊き中世紀的土地占有と、地主の、また政府「分與」の土地專有が、終局時に國の將來の發展の忍び得ない障害となり、且つ此の舊き土地占有が、必然的に最もはりつめた容赦なき破壊となつた其の歴史的瞬間に於ける、農民大衆の心理をあらはしてゐる。彼の全き、最も深き感情、最も熱烈なる反抗、資本主義に對する告罪の絶えざるものは、新しい、見えざる、分明ならざる敵がぶつかり始めた所の家長的農民のあらゆる恐れをあらはしてゐる。その敵は、何處からともなく町から、或は何處からともなく外國からやつてきて、農村生活のあらゆる基礎を破壊する。己れと共に、見た事

のない、瓦解、赤貧、餓死、粗暴、賣淫、徵毒——クーボン君に依り完成された強奪の最新式收納の、露西亞地方への輸送に依り、百倍も鋭くされた「原始蓄積時代」のあらゆる不幸を運んでくる。

だが熱心な反抗者、熱烈な告罪者、大批評家はそれと共に自分の創作中に家長的な質朴な農民にのみ本性であつて、ヨオロッパ風に教育された作家にはない所の、露西亞にぶつかつてくる所の危機の原因と、危機から逃れ出る方法に就ての不理解をあらはしてゐる。農奴的巡查的國家との戦は、彼に於ては政治の否定と變り、「惡への無抵抗」の教義となる。一九〇五年——一九〇七年の大衆の革命的戦闘からの完全なる離別となる。政府の寺院との戦闘は新しい。淨化された宗教、即被抑壓大衆のための、新しき淨化された、潔白な毒を説法する事と一緒になつてゐる。私人的土地財産の否定は實際の敵、地主の土地占有、彼の權力の政治的武器即專制に對してのあらゆる闘争の集中にあらずして、幻想的な流散し易き、溜息となる。資本主義と、資本主義に

依り大衆に服屬せしめられたる不幸の告罪は、萬國の社會主義的プロレタリア階級に依り導かれる所の、この全世界の解放闘争への全く冷淡なる態度と一緒になつてゐる。

トルストイの見解中の矛盾は、單に彼の個人的な思想の矛盾ではない。露西亞の社會の種々なる階級と、種々なる社會層の心理を、轉形期に於て、革命期時代に於て決定する所の、社會的關係、歴史的傳統の複雑せる、矛盾せる條件の上層に於ける反映である。

それ故にトルストイの正しき評價は、此等の矛盾の最初の終結の時に、革命の時に自己の政治的役割と、自己の戦闘に依りて、國民の自由のため、且搾取より大衆解放のための戦闘に於ける、自己の指導者たる使命を證せる——民主主義の問題に對して限りなき熱心さ、ブルジョア（百姓をも加へて）民主主義の限界性と矛盾とに對して戦ひ得る事を證せる階級の見地からして始めて可能である——社會民主主義的プロレタリアの見地からしてのみ始めて可能である。

政府の新聞紙上に於けるトルストイの評價を見よ。彼等は自己の「大作家」に對する尊敬を確言しつつ、同時に「最も神聖なる」宗教會議をかばひつつ、鰥の涙を流してゐる。だが最も神聖なる聖者達は、國民にはらを吹いて、トルストイは「後悔」したと云はんがために、臨終者の所へ坊主をやつて、特別に見ぐるしい一事を爲しおぼせたばかりである。「最も神聖なる」宗教會議は教會からトルストイを除名した。素的な事だ。此のおてがらは國民裁判の時に、ヨオロッパの侵略と、ツアルの黒百人組黨の他のおてがらを支持してゐる法衣をきた官吏、クリスト信者の憲兵や、黒き訊問者と共につぐなわれるであらう。

自由主義新聞に依りて爲されたるトルストイの評價を見よ、彼等は「文化人の聲」「世界の異口同音的な應答」「正義と善の理想」とかいつた空つばな政府自由主義的な、陳腐な教授的な口調で、其場のがれの事を云つてゐる。そのためにトルストイがブルジョア科學をあんなにこつびどくやつつけたのに。——正當にやつつけたの

に。彼等はトルストイの國家、教會、私人的土地財産、資本主義に對する見解に對して、自分の評價を端的に、はつきりと云ふ事が出来ない、——檢閲官が邪魔するからではない。反對に檢閲が彼等を困難から救つてやつてゐるのである。彼等が出来ないのは、トルストイの批評のあらゆる論證は、ブルジョア自由主義に對する鐵拳であるからである。我が時代の最も病的な、最も呪ふべき問題に對する、外ならぬトルストイの一個あけつびろげな、恐れざる容赦なき鋭き質問が、我が自由主義的な（そして自由國民主義的な）新聞、雜誌記者の瞬味な「文化的」な嘘言の月並な言葉、陳腐な逃げ口上を、面と向つて攻撃してゐるからである。自由主義者はトルストイの味方である。宗教裁判に對して。——だがそれと一緒に………べホウツエフをもちかばつてゐる。彼等とは「議論してもよい」が、一つの黨に長く暮して行く事が「必要で」あり一緒に文學上にも政治上にも仕事をする事が「必要」である、だがべホウツエフはアントニイ・ポルキンスキーと接吻する。

自由主義者は第一にトルストイは「偉大なる良心」であること云ふ事を云ひ出す。だが此れは「新時代」やそれに似かよつたものが、色々な口調で云つた所の、空っぽな言葉ではないか。これはトルストイに依つて置かれた民主主義と社會主義の固り切つた問題へのあともどりではないか。これは第一に彼の未來にあるものではなくて、彼の過去に屬する所の、彼の理智ではなくて、偏見をあらはす所のもの、即、彼の政治の否定、彼のあらゆる階級的國家に對する嵐の如き反抗ではなくて、精神的自己革命の説教を引つぱり出すのではないか。

トルストイは死んだ。そしてその弱點と無力が、天才的藝術家の哲學中に反映せられ、藝術中に書かれた革命前期的の露西亞も過去に去つた。だが彼れの遺産のなかには、過去に過ぎ去つて失はないもの、未來に屬するところのものがある。この遺産は露西亞のプロレタリア階級が受けとつて、その遺産の上に働くのである。それは苦役し、搾取されつつある大衆に、大衆が自己革命や、「神の生活」につひての溜息に依

つて、自己を限られないために。一九〇五年には唯僅かに傷けられただけで、尙絶滅の必要あるツアルの専制、地主の土地占有に對する新しい攻撃を蓄積するために、大衆が自らを高めるために、トルストイの國家、教會、私人的土地財産に對する批評の意味を説明するであらう。それは大衆が資本と貨幣權力の呪はしきものに依つて、己れを限られないために、大衆が己れの生活と闘争のあらゆる歩みを資本主義に對する藝術的勝利へ導くことを學ぶために、己れを社會主義的戰士の統一された何百萬人も軍隊に結合さす事を學ぶために、資本主義に對するトルストイの批評を大衆に説明するであらう。その戰士は資本主義をてんぶくし、國民の赤貧なき、人間に依る人間の搾取なき、新社會を造るであらう。

一九一〇年十一月二十九日（露歴十六日）「社會民主」十八號より

ニコライ・レーニン著

ヨセフ・ヂツゲン

廿五年祭に面して……………（フラフダー二〇二號より）

ヨセフ・ヂツゲン二十五年祭に面して

今より二十五年以前に、即ち一八八八年に、ドイツの優れた社會民主的哲學著作家の一人なる、製革工、ヨセフ・ヂツゲンが死んだ。

「人間頭腦労働の本質」(一八六九年出版)「智識の理論の領域に於ける社會主義者の補註」「哲學のアクビジト」等の著作(大部分は亦ロシア語に翻譯されてゐる)はヨセフ・ヂツゲンのものである。マルクスは既に、一八六八年十二月五日にクーゲルマンにあてた手紙のうちに、最も確實なる、彼の位置の評價及び、哲學労働運動史上に於ける彼の位置の評價をあたえてゐる。

マルクスは書いてゐる、——「づつと前に、ヂツゲンは私の所へ『思索の能力』に關する原稿の断片を送つてきた。それは理解の多少の錯雜及び、余りにしばしばなる

重複あるにもかかはらず、そのうちに、多くの優秀なる、而して、労働者の獨立的思想の生産物として、驚くに値する思想を含んでゐる。」

此處にヂツゲンの重要さがある。獨立的に唯物辯證法、即ち、マルクスの哲學にやつてきた労働者と云う事である。特に、彼が學派の創始者を以て任じなかつた事は、労働者ヂツゲンの性質のため貴いのである。ヨセフ・ヂツゲンは既に、ほんの少數者がマルクスを理解したばかりの、一八七三年に、この傾向の、か、し、ら、と、さ、し、て、マルクスを語つてゐる。イ・ヂツゲンは、マルクス及びエンゲルスは「缺くべからざる哲學の學派を占有してゐる」と考へた。而して、マルキシズムの重なる哲學的著作の一つであるエンゲルスの「アンチ・ヂューリング」が出た後長くたつた、一八八六年にヂツゲンはマルクス及びエンゲルスにつひて、この傾向の「一般に認められたる創設者」につひてと、書いてゐる。

これは、イ・ヂツゲンの、正に、「多少の錯雜」につかまらんと模索してゐる、プ

ルジョア哲學、即、觀念論、不可知論（同時にマハ主義）の追隨者を批評するために注意する必要がある。イ・ヂツゲン自身、あざけり笑つて、斯かる崇拜をつきもごすであらう。

▲自覺せるものとならんがためには、勞働者は、イ・ヂツゲンを讀まねばならない。だが一分間も、ヂツゲンは、必ずしも、マルクスとエンゲルスの教義の正確なる説明をあたえてゐるのでないと言ふ事を忘れてはならない。マルクスとエンゲルスのもとにおいてのみ、唯、哲學を學び得るのである。

イ・ヂツゲンは、何よりも廣汎に、單純なる俗化されたる唯物主義が傳はしてゐた時代に書いたのである。これに依つて、イ・ヂツゲンは特に、唯物主義の歴史的變史、唯物主義の辯證法的性質、即、發展の見地にたつ事、あらゆる人間の智識の關聯ある事を理解する事、世界の現象のあらゆる側の聯携と、相互依存を理解する事、自然—歴史的唯物主義を歴史の上への唯物的見解にまで、持つて來る事の不可缺なる事を強調

した。

人間智識の比較的なる事を強調しつつ、イ・ヂツゲンはしばしば、觀念論と不可知論に不法なる讓歩をなしつつ、錯雜におち入る。哲學上の觀念論なるものは、多かれ少かれ、坊主義、即、信仰を科學以上或は科學と同格の位置に置く、或は一般に信仰に座席をあてがう所の教義の狡猾なる防禦者である。不可知論（即ギリシヤ語で、「A」——不、及び「グノシス」——智識である）は唯物論と觀念論との間の狐疑逡巡である。即、實際上に於ては、唯物的科學と、坊主義との間の狐疑逡巡である。カント（カント派）ヒューム（實證哲學者、現實主義者）一味は不可知論者に屬する。これに依つて、ブルジョア階級の最も反動的な哲學者中のあるもの、公然たる惡魔、教會の直接的支持者が、イ・ヂツゲンの誤を利用しやうと模索した。

だが、一般的に、且、全體として、イ・ヂツゲンは唯物主義者である。ヂツゲンは坊主義と不可知論の敵である。在來の唯物主義者と——と、ヂツゲンは書いてゐる

——吾々と共通せるものは、吾々が觀念の先行的或は根本的なものとして物質を認める事のみである。此は「唯一」のものであり、且、哲學的唯物論の心髓である。

智識の唯物的理論は——と、イ・ヂッゲンを書いてゐる、——智識の人間の機關が如何なる形而上的光をも放つものでなく、他の自然の一片を反映する自然の一片であると云う事の認知にまで引下される。これは、永久に運動し、變形する物質の人間意識に於ける反映の唯物的理論である、——凡ゆる、政府教授的哲學の憎惡、恐慌、諷刺、曲解を呼び起す所の理論である。而して、眞實の革命家の非常に深い情熱をもつて、イ・ヂッゲンは「坊主主義の舊世界的下僕」教授觀念論者、現實主義者等を鞭うち且、すたんぶを押した。「あらゆる黨のうちで、——と、イ・ヂッゲンは哲學的「黨」即ち、唯物主義と觀念論者につひて正當に書いてゐる、——「最も汚穢なるものは中間の黨である」

「ルチ」(光：譯者)の編輯部及びエス・セムコフスキイ君は、「ルチ」九十二號)

此の汚穢なる黨」に屬する、編輯部は「前書」をあたえた。「一般哲學的見地を吾々はとらない」だが、ヂッゲンの説明は「正しくはつきりしてゐる。」

これは甚しき嘘偽である。セムコフスキイ君は、正に彼の「錯雜」をつかみ出し、ヂッゲンのマルクスの評價につひては黙殺して、イ・ヂッゲンを背神的に、誤説し、見苦しくしてゐる。併しながら、マルキシズムの哲學につひて、最も學問ある社會主義者、ブレハノフも、ヨ・オロツバに於ける最上のマルキストも、全く、此の評價を認め、てゐるのである。

セムコフスキイ君は、「一の世界か二つの世界かの問題(此れは「根本的な問題」の様だ！ さあ勉強なさい。可愛い人よ、せめて、エンゲルスの「ルドリヒ・フォイエルバッハでも讀みなさい)及、世界と現象の問題(ヂッゲンは眞實世界を現象にのみ引下したかの様である。これは、イ・ヂッゲンに對する、坊主的教授的そしりである)を瞥見する」と稱して、哲學的唯物主義をも、ヂッゲンを歪めてゐる。

だが、セムコフスキー君のもとに於て、曲解が皆かぞへなほされるわけではない。マルクス主義に興味を持つ労働者をして次の事を知らしめよ。「ルチ」の編集部は、マックス主義の破産管財人の聯盟であること云う事を。或るものは床下の穴藏、即、プロレタリア階級の黨を破産せしめる。(マヨフスキー、セドフ、エ・フデー等々)。他のものはプロレタリア階級の至高の理想を破産せしめる。(バトレソフ、カリツォフ等々)、第三のものは、マルクスの哲學的唯物論を破産せしめる。(セムコフスキー君及其仲間) 第四のものは、プロレタリア社會主義のインターナショナル主義を破産せしめる。(ブンド派、カソフスキー、メデヨム等——「教育ある國民的自治」の一味。) 第五のものは、マルクスの經濟的理論を破産せしめる。(地代の理論と「新」社會學をもつたマスロフ君) 其他大勢である。

セムコフスキー君及び、彼をかばつてゐる編集部によるマルキシズムのひどい曲解は、「破産管財人の、此の文學的「聯盟」の「活動」の最もあざやかな見本の一つ

に過ぎない。

一九一三年五月五日(フラフダー〇二號)より

313
113

誌雜藝文義主會社一唯本日

線戰藝文

定價 一冊 三十錢

■ 質の向上量の擴大と相俟つて
最近とみに進展せる文藝戰線



■ 農民勞働者も 俸給生活者も
最近競つて讀む 文藝戰線

半年 一圓三十錢

京東替報 社線戰藝文 外市京東
番七八三九五 一六寺圓高

昭和二年二月二十六日出版
昭和二年三月三日發行 定價拾五錢

東京府西區橋町番地二二九
編輯發行 山川 亮 殿
印刷所人

發行所 思想社

313

113

誌雜藝文義主會社一唯本日

線戰藝文

定價 一冊 三十錢

質の向上量の擴大と相俟つて
最近とみに進展せる文藝戰線



農民勞働者も 俸給生活者も
最近競つて讀む 文藝戰線

半年 一圓三十錢

東京市外 文藝戰線社 振替 東京 七番 九三 八七

昭和二年二月二十六日印刷
昭和二年三月 三日發行

定價拾五錢

編輯發行 東京府西巢鴨町池袋二二九
余印刷人 山川亮藏

發行所 思想社

終

